

大聖堂のある街で

第2話 リカ



堀田耕介

リカ

朝、目が覚めるとえっちゃんはまだもう帰っていた。お父さんは自分の部屋で寝息を立てている。お父さんは7時には帰って来るけど、細かい仕事はぼくが寝た後、朝までやっている。昨日はえっちゃんと話しこんでたから、そのあとの仕事はたいへんだっただろうな。いつもぼくはお父さんを起こさないで、お父さんの作っておいてくれた朝ごはんを食べて、学校に出かけている。

階段を1階まで駆け降りて、大聖堂への坂道を登っていく。

「ユキ、おはよう！」

「おはよう、しんちゃん。」

「今日、学校が終わったらエリオットの丘に行かないか？何かすごい風を上げてる人がいるんだってさ。」

「風？」

「うん、丘の上で、百も二百もつなげた風を上げてるんだって。あの丘には上昇気流があるからすごく

上がるんだってさ。人の乗った凧も上げてるんだってよ。」

「へー。」

でも今日は、学校が終わったらすぐラプラス通りに行きたい。昨日見た女の人に会えるかもしれないから。

「ごめん、今日は学校が終わったらすぐ、えっちゃんのうちに行かなきゃいけないんだ。」

「ええ？だって凧の人、今日行かないといなくなっちゃうかもしれないぜ。」

「うーん、ぼくも見たいけど、今日はだめなんだ。」
「ふーん。しょうがないなあ。じゃあ、りっちゃんたち
と行くからいいや。」

「ごめんね。」

大聖堂の横にぼくたちの学校がある。毎朝司祭
さんがやってきて朝のお祈りをする。そのあと一時
間目は国語、二時間目は算数、三時間目は科学
で、四時間目は神さまの話か世の中の話。毎日同
じ順番で、お昼には終わる。正午のお祈りが終わ

ると、子どもたちが大聖堂の前の広場に飛び出してくる。みんなそのあたりで缶けりをして遊んだり、紙芝居を見たり、親と一緒に働いたり、エリオットの丘やミッドランド川に遊びに行ったりする。いつもぼくはしんちゃんやりっちゃんと一緒に遊んでいるんだけど、今日はそんなこととしてられない。お昼のお祈りが終わるとすぐ、大急ぎで家に戻った。お父さんは起きだして、出かける準備をしていた。

「ただいま。」

ぼくは大急ぎで靴を脱ぐ。

「遊びに行くのか。」

「うん、ラプラス通りで待ち合わせしているんだ。」

「えつことか？」

「違うよ。キリヤ。」

ぼくはコーシー広場でアイスクリームを売ってる同級生の名前を出して、話をでっち上げた。

「じゃあお父さんと一緒に行くか？」

「ううん、お昼ご飯を大急ぎで食べて、すぐ行くから。」

「なんだせわしないな。」

お父さんは笑った。

「そこにパスタ作っておいたから、ゆっくり食べて
け。」

ぼくは大急ぎでお皿に盛って、口の中にパスタを
詰め込んで、紅茶で流し込んだ。

「じゃあ行ってきまーす！」

「あんまり慌てて転ぶなよ。」

「大丈夫！」

と言いながら、ぼくは階段を駆け降りる途中で転
びそうになった。

ぼくは走って市庁舎まで行った。広場は鳩が群れていて、ぼくが近づくと一斉に飛び立った。海に向かって真っすぐ伸びるラプラス通りに入ると、きれいなお店が並んでいる。あの人は、こんな店で働いているんだろうか。ぼくは一軒一軒、お店をのぞいていった。どの店にもきれいな女の子がいたけど、ぼくの探している人はいなかったし、ぼくの探している赤いコートの女の子が一番きれいだと思った。フランクリン時計店の前に来ると、店の奥で鼻髭を

生やしたおじさんが時計を見ていた。お父さんが来るのを待ってるのかもしれない。ぼくはそつと通り過ぎて次の店の前に行った。

だんだん高級品の店が多くなってくる。ぼくは学校帰りのままで、白いシャツに黒の半ズボン。ちよつと気が引けてきた。歩道のベンチに座り込んで、空を見上げた。ああ、やっぱりそう簡単には見つからないよなあ。空は真っ青で、飛行機雲が西から東へ、まっすぐに伸びていた。しんちゃんたち、凧を見られたんだろうか。凧を上げてるのってどんな人

なんだろう。こんなことなら、ぼくも一緒に行けばよかつたかな。

ぼくは首を振って立ちあがった。ううん、あの人はきつと見つかるさ。でも見つけてどうする？どうするって言うても：胸がときどきした。何を期待してるんだろう。本屋の店先でただぶつかっただけの子どものことなんか、覚えてるはずもないのに。

ぼくは首を振った。ううん。それでも、あの人に会いたい。

ぼくはまた歩き始めた。バス停があつて、何人か

の人がバスを待っていた。それを何の気なしに見ると、昨日の白いコートの女の人がバスに乗り込むのが見えた。ぼくはどきつとした。

「待って！」

ぼくは走った。でもバスは動きだしてしまった。窓から、あの女の人が吊革につかまっているのが見える。ぼくは追いかけた。でもバスはぼくに構わずに、排気ガスの匂いを残して行ってしまった。はあはあ息を吐きながらぼくが膝に手を突いて立っていると、小さな女の子がぼくに話しかけてきた。

「これ、あげる。」

女の子は、温かいレモネードをぼくに差し出した。

「ぼくにくれるの？」

「うん。」

「なんで？」

「女の子にプレゼントをもらって理由を聞くなんて野暮ね。ありがとうって言うてもらえばいいのよ。」

ぼくはびっくりした。

「ありがとう。」

女の子は満面の笑みを浮かべて言った。

「それでいいのよ。どういたしまして。」

お母さんはどこかそのへんにいるんだろうか。ぼくがきよろきよろすると、

「誰を探してるの？」

「きみのお母さんはどこにいるの？迷子になってない？」

女の子は笑い出した。

「迷子になってるのはあなたの方じゃない。私は迷子になんかなってないわ。」

「でも、一人でこんなところにいて、大丈夫？」

「大丈夫よ、人の心配より自分の心配したら？」

「自分の心配って……」

「あなた、誰か探してるんでしょ。」

「どうして分かったの？」

「誰が見たってわかるわよ。お店を一軒一軒のぞいで、バスを追いかけたりすれば。」

「そうだあの人、せつかく手掛かりを見つけたのに。」

「あの人に聞いたってだめよ。あなたの探している人

は見つからないわ。」

「ぼくが誰を探してるか知ってるの？」

「赤いコートを着た素敵な人でしょ？」

ぼくは驚いた。

「どうして知ってるの？」

女の子は得意げな顔をした。

「ふふ。内緒。」

「君は誰なの？」

「私リカちゃん」

「お人形みたいな名前だね。」

「私のパパが、私に似せてお人形を作って、それをおもちや屋さんで売るようになったのよ。だから私が本物のリカちゃん。」

「ほんと?」

「本当だったら面白いでしょ? だったら本当なのよ。」

「ええ、じゃあうそなの?」

「本当だって言ってるでしょ。」

「それに何でそのリカちゃんがこんなところにいるのさ。」

「お友達のところ遊びに行くのよ。」

「お友だち？」

「リカちゃんのお友達はワタルくんが決まってるですよ。」

「きまってるんだ。」

「きまってるのよ。それでパパったら、ワタルくんのお人形も作ったのよね。そうしたらうちのお兄ちゃんがワタルくんのお人形を裸にして、おちんちんがついてない！っていうの。」

「ああ、誰か言ってた。おちんちんついてないからこ

の子は男の子じゃないって。」

「ばかねえ。女の子のお人形にそんなものつけたら大変なことになるでしょ。」

「どうして?」

「みんな、きやあ変! って言って、取っちゃうもの。」

「う。痛い。」

「どこ押さえてるのよ。あなたのおちんちん取るわけじゃないから大丈夫よ。」

「取られたら困るよ。おしっこできない。」

「もつとほかのこともできないでしょ。」

「ほかのこと？」

「ああ、子どもにそんなこと言っちゃだめよね。」

「そんな、君に子ども扱いされたくないよ。」

「男の子って子どもなんだから。」

「君何歳なの？ませた口ききすぎだよ。」

「私はねえ、はっぴやく、ろくじゅう、ごさい。」

「なにそれ。」

「あの時計塔を見て。」

リカは市庁舎を指さした。

「あの時計塔は、私が3歳のときに来たの。それ

が862年前よ。それから100年から200年に一度、時計は作りかえられてきたの。」

「今度、ぼくのお父さんが作るんだよ。」

「知ってるわ。あなたのお父さん、この街で一番の時計職人だもの。街中の職人と一緒に、金色のぴかぴかの文字と針、それに文字盤。生まれ変わるのが楽しみだわ。」

「君、何でも知ってるんだね。」

「何でも知ってるのよ。865歳だから。」

「君は不老不死なの？」

「あら難しい言葉知ってるわね。不老不死ってわけじゃないけど、でも似たようなものかもしれないわ。」

大聖堂から、1時の鐘の音が聞こえた。

「私もう行かなきゃ。ワタルくんに怒られちゃう。」
「何でもわかるなら、ぼくがあの人に会えるかどうかわかる？」

リカは笑った。

「さあね。でも探し続けていれば、思いがけないときに会えるわよ。探すのをやめたら、もう見つからない

い。人生ってそんなものでしょ？」

「12歳の子供に人生を語らないでよ。」

「じゃあね！」

リカは駆け出した。と見る間に、ふっと消えていなくなってしまうた。

「なんだったんだ、今は……」

ぼくは空を見上げた。さっきの飛行機雲が、もうだいぶ形が崩れて、青い空に溶けて行っていた。

大聖堂のある街で 第2話 リカ

<http://p.booklog.jp/book/44265>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44265>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44265>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.